

—— 食文化随筆 ——

ジャガイモの世界史物語（１）

武蔵野短期大学教授 前 川 清

☆未来に生きるジャガイモ

かつて旧約聖書に書かれてない食物として、タブー（禁忌）視され、あるいは「貧者のパン」として蔑視^{べっし}されながら、世界史の歩みとともに国際的な食物としての価値を広めてきた「ジャガイモ」。

そのジャガイモの栽培や品種改良、伝播流通、有効利用、主食化への歴史は、過去四世紀における国家・民族の興亡盛衰、戦争と平和、革命・内乱、さらには民族の大移動や大航海、文明の交流発展と密接に結びつき、世界の歴史に大きな影響を与えてきた。

それは新世紀に入っても同じである。いまでも世界の各地で起こっている食糧不足のなか、長期的な国際的解決策として、ジャガイモの現地栽培や普及発展の効用が注目されている。とくにわが国の隣国北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の食糧危機に対する日本の支援策として、そうである。

ジャガイモは人類・国家の歴史に大きな影響を及ぼしてきただけではない。栽培や品種改良、伝播・普及の歴史を通じ、多くの物語やドラマ、事件や冒険を生んできた。

さらにジャガイモは、未来の大きな可能性をもつ食物である。また、多様な「特色と変化」に富んだ食物であり、国際的伝播性の大

きい食物である。それだけに地球人口の増大にともなう食糧不足など、地球環境の変化の対応に役立つ重要な食物である。

☆ ジャガイモとの愛縁奇縁

「ジャガイモの世界史」に筆者が興味をもちはじめたのは、延べ6年余にわたる海外生活のときである。フランスを中心とする2年半の欧州留学、エジプトを中心とする3年半の中東での大使館勤務。その間「ジャガイモの世界史」にゆかりの深い国々の人達に接し、家庭に招かれ、家族とともにいろいろな種類の変化に富んだ「ジャガイモ料理」を食べながら、ジャガイモについて耳学問や舌学問をした。

また、ジャガイモと国際情勢の変化の関係を知る機会を得た。ドイツの人口増加、国力の隆盛とジャガイモの国民食化の関係。アイルランドの「ジャガイモ飢饉」が生んだ米国への大量移民と、それが米国の社会や政治に及ぼしてきた影響等々。

健康食品としてのジャガイモの価値を実感したのは、北欧諸国や英国への旅行時である。とにかく生野菜に乏しい北欧諸国では、ジャガイモはビタミンCの重要な供給食物であり、いわゆる寒冷地食物として大切である。

海洋国家英国において、ジャガイモは18世紀以後「航海食、海軍食の食材」として、とくに重用された。脚気防止に役立つビタミンB₁を多く含んでいるせいもある。英国海軍の伝統的な海軍食の一つに「ジャガイモのたくさん入ったカレー」があるが、それは明治の日本海軍に伝わり、現代にも生きている。海上自衛隊では、毎週金曜日（以前は土曜日）昼の隊内食は全国の基地一斉にカレーのメニューである。しかも、かの横須賀市は日本の明治海軍のレシピをもとに、インスタントカレー（パック入り）をつくり、「海軍カレー」として商品化し、数年前から売り出している。

ジャガイモは旧陸軍でも兵食にとり入れている。陸軍のジャガイモ（馬鈴薯）料理の特色は、そのメニューの豊かさにあった。日露戦争（1904～'05）後に編さん試行され、昭和6年（1931）に全国の駐屯部隊に公式配布された、陸軍省発行の「軍隊調理法」には、馬鈴薯を食材とする約6種類のメニューとその調理法が載っている。

- ① 牛肉と馬鈴薯の軟か煮
- ② 鮭^{さけ}馬鈴薯和え
- ③ 馬鈴薯スープ
- ④ 馬鈴薯^にの煮染め
- ⑤ 馬鈴薯のきんとん
- ⑥ 粉吹き馬鈴薯とカツレツの付け合わせなど。

因みに、①の「牛肉と馬鈴薯の軟か煮」は、いまどきの若者たちが好む「肉じゃが」の原型をなすもので、いまに残るレシピがそれを示している。

世界の食文化史を概見するに、新しい食材や料理が民間に広がり普及し、国民食化するのに陸海軍が果たした役割が大きい。とくに、

明治・大正時代のわが国における洋食（材）の導入がそうであり、徴兵制であった旧軍時代はなおさらであった。

☆ ジャガイモの言語伝播史

(1) 英仏独伊西蘭語名の由来

ジャガイモは英語で「ポテート (potato)」、フランス語で「ポム・ド・テール (pomme de terre)」、ドイツ語で「カルトウフル (kartoffel)」。スペイン語とイタリア語は、ほぼ同じ発音の「パタート (patata)」で、英語の「ポテート」と同じく、その語源は原産地の南アメリカ北部アンデス高原の原住民の土語「バタート」の発音に由来するとの説が有力である。

フランス語の「ポム・ド・テール」はラテン語由来の合成語で、土地（テール）の中で実るリンゴ（ポム）を意味する。リンゴは、旧約聖書に出てくる、アダムとイブのエデンの園の禁断の木の果実として、古代から欧州や中東に存在した果実である。もっとも、当時はピンポン玉ほどの大きさであったようで、「男の大きな喉仏^{のどぼとけ}」を指して「アダムのリンゴ」というラテン語由来の、フランス語の表現がそれを暗示している。

ラテン語や古代ギリシャ語には、ジャガイモを意味する言葉は見当たらない。それは、古代から中世にいたる地中海地域や欧州にはジャガイモが存在してなかったこと、あるいは未だその存在が知られていなかったことを示している。

通説によれば、ジャガイモが欧州大陸にもたらされたのは16世紀初期、スペインの新大陸探検家たちによってである。次いで同中期、イギリスの探検家たちによってである。それ

らの物語りは別に述べるが、そのジャガイモが一部の人たちの観賞用や薬用としてでなく、広く民衆の食用として最初に栽培され、常食化されたのは、欧州の貧しい辺境の島国アイランドにおいてである。

ジャガイモが、ポテートの英語名のほかにスパニッシュ・ポテート、あるいはアイリッシュ・ポテートとも呼ばれる由縁である。それら別名はジャガイモを「サツマイモ」(スイート・ポテート)と区別するのに便利であり、米国においてはアイリッシュ・ポテートの語がよく使われる。

オランダ語でジャガイモは「アードアップル(aardappel)」。「地のリンゴ」を意味する合成語である。さきに記したフランス語の名付けかたの系譜に属する。

(2) アラビア語名の由来

アラビア語でジャガイモのことを「バタート」という。スペイン語あるいはイタリア語系譜の名称である。しかし、「フレンチ・ポテート」の別名でも呼ばれている。その別名には、フランスからエジプトへのジャガイモ伝播の興味深い歴史がある。

1798年4月、ナポレオンはエジプト遠征に際し、フランス艦隊に多量のジャガイモを航海食および砂漠での作戦用に搭載させた。腹心の衛生保健薬剤師A.A. パルマンティエ(1737~1813)の進言によるものである。彼はジャガイモの導入・改良・普及のみならず、現在に残る「ジャガイモ料理の名レシピ」をつくり、その民食化に貢献するとともに、英国海軍がジャガイモを航海用の健康食品として密かに利用しているのを見抜き、エジプト遠征のフランス艦隊にもそれを導入した。さらに、ジャガイモをエジプトで現地栽培させ、

その普及をはかった。

エジプト遠征時、フランス軍が駐屯したロゼッタやダミエッタ地区は、いまでもフランス人との混血の美女と、美味のフレンチ・ポテートの産地である。それを3年半のエジプト勤務の間に筆者は見聞した。

(3) 日本・中国語名

「馬鈴薯・ジャガイモ・ポテート」。これら日本の代表的名称は、その由来や伝播ルート、時代の変化を示唆している。

馬鈴薯は、駅馬の鈴のように多く実がなることからきた名付け説が有力で、明治から昭和初期までの新聞記事や教科書、公文書に一般的に使われている。明治の作家、國木田独步は小説「牛肉と馬鈴薯(明治34年刊)」の中で、「馬鈴薯さえあれば米はなくとも食うに困らぬ」と漢語由来の名詞を使っている。

ジャガイモは、16世紀中期にインドネシアを植民地化したオランダの商船により、ジャガトラ(現在のジャワ島)から16世紀末に日本に持ちこまれ、「ジャガタライモ」から転じた名前であるといわれている。別に、ジャカルタ港の名前に由来するという異説もあるが、オランダ統治時代の同港は「バタビア」と呼ばれていたのも、ジャカルタ由来説は説得力に乏しい。

ジャガイモの栽培・食用化が日本で本格化するのには、明治の初期、北米から優良種が北海道に導入されてからである。そして、その陰に北海道開拓使顧問として米国から派遣されたH. ケプロン元合衆国農務局長(1804~'84、在日は'71~'75)や札幌農学校教頭W.S. クラーク博士(1826~'86、来日は'76)の尽力があったとわれているが、それを裏付ける文献に接したいものである。

ジャガイモの日本伝来ルートとして、さきに述べたオランダによるインドネシア・ルート、アメリカ・ルートのほかに、シベリア・ルートがある。18世紀中期にドイツからロシアに伝わったジャガイモは、ロシアの東進政策にともなってシベリアに広がり、18世紀末にはすでに千島列島でも栽培されていた。間宮林蔵・近藤重蔵と並び称される江戸末期の北方探検家、最上徳内（1755～1836、山形出身）は、数度（1785～'98の間）にわたりくなしり えとろふ国後・択捉島を探検したが、その折ジャガイモを北海道に持ち帰り、「徳内芋」の名で呼ばれていた。

ジャガイモには、ほかにも導入者にちなんだ名前がいくつか残っている。「せいだいも」「神谷いも」など。「せいだいも」は甲府の代官中井清太夫が九州や泉州から取り寄せた種芋を、富士五湖のほとりの上かみくいしき九一色村で試植し、関東甲信越に広がったジャガイモで、天明や天保の大飢饉のとき多くの人を救ったので、「お助けいも」とも呼ばれていた。「神谷いも」は、明治末期にドイツから種芋を輸入した大商人（神谷酒精株式会社）神谷伝兵衛の名に由来する。

ジャガイモは、「えぞいも」「甲州いも」など、産地ゆかりの名称、あるいは伝来元の国や地域名にちなんで「カラいも」「南京いも」「オランダいも」「アメリカいも」と呼ばれた時期もあるが、「サツマイモ」や「サトイモ」と区別するための便利な呼び名である。

ところで、中国語でジャガイモを意味する常用語は「馬鈴薯」と「土豆」で、前者は文（章）語的に、後者は口語的に使われているようである。

(4) ジャガイモからポテートへ

大正時代に入り、第一次世界大戦（1914～'18）を契機として、日本でのジャガイモの栽培は飛躍的に増大した。その背景には、ジャガイモを原料とする広範な澱粉工業の発達にともなう国際的需要の増大があり、折しも第一次大戦の勃発による欧州からの澱粉輸入の困難が重なり、逆に日本が澱粉の輸出を求められるという事態の到来があった。加うるに、人口増加にともなう直接食用としてのジャガイモの国内需要の増大があり、こうして日本におけるジャガイモの生産は大きく伸びた。

そして、第二次世界大戦後は、一般の食文化の洋風化とともにジャガイモは「ポテート」と呼ばれて若者や子供たちの愛好食品となり、現在にいたっている。フライドポテト、ポテトチップス等の加工品。コロッケやサラダなどの調理済み食品。牛肉や豚肉と煮つけ合わせた家庭料理の味「肉じゃが」。ビフテキの添えものにもよいマッシュ・ポテート。さらにジャガイモからとれる澱粉は、和洋菓子、パン、かまぼこ、ソーセージ、麺類、酒、ビール等の食品はもちろん、製紙・繊維・接着剤・各種薬品や化粧品原料として広範大量に利用されている。

☆ ジャガイモのスペイン渡来

新大陸を発見した先駆的大探検家C. コロンブス（1446?～1506）は、ジャガイモの欧州導入に直接かかわってはいない。

イタリア生まれの彼はスペイン女王イサベラの支援を受け、1492から1504の間に4回にわたり中米・カリブ海諸島を探検して大西洋航路を開拓し、珍しい動植物や鉱物を持ち帰った。しかし最初の探検から持ち帰った芋は「栗のように甘かった」という。おそらくサ

ツマイモの一種（バタータ）であろう。

南米のアンデス高原原産のジャガイモを初めて欧州に持ち込んだのは、16世紀の中頃、スペインの新大陸探検征服者（コンキスタドル）として名高いH.コルテス提督（1485～1547）や下級軍人出身の大探検家F.ピサロ（1475～1541）の一行である。フランスのラルース百科全書関係資料によれば、コルテス提督がスペイン国王に書き送った「報告書簡」には、アステカ王国の征服とともに、現地民インディオの生態や衣食住、そして欧州には存在しない各種の根菜類（ジャガイモ、サツマイモ、ヤムイモなど）やトウモロコシ、カボチャ、タバコなどのことが載っている。

「新大陸のモーゼ」といわれ、熱心なカトリック教徒でもあったコルテス提督は、聖書に書かれていない異教徒の食物としてのジャガイモを、最初は禁忌視したという。しかし、やがてその価値を認め、兵食用にとり入れ、とくに乾燥ジャガイモ（チューニョ）を携帯用糧食に利用した。

筆者がフランス国防大学留学時代のスペイン海軍の留学生、ゲリラ・ガルシア少佐（当時、のち駐仏武官）の説によれば、コルテス提督は軍医の提言をとり入れ、ジャガイモを壊血病（ビタミンC欠乏症）予防の航海食品として船員たちに食べさせた。しかし、それをポルトガルやイタリアの探検隊や船員達には秘密にさせていたという。そのジャガイモを航海食として本格的にとり入れたのは、それから半世紀後のイギリス海軍である。ちなみに、スペイン海軍がドレーク提督率いるイギリス海軍との海戦で大敗したのは1588年である。

☆ ジャガイモ伝播とレコンキスタ

それにしても、注目すべきは英仏両国に先立ち、スペインとポルトガルが大航海時代の先頭に立ったことである。欧州の辺境イベリア半島の両国が、アメリカ新大陸やアジアへの航路を拓いて海外に進出し、大航海時代の先進国となった背景には興味深い世界史の流れがあり、キリスト教文明とイスラム文明の結合がある。

五世紀余の間、イスラム・コンクエスト（征服支配）下におかれたイベリア半島地域は、イスラム文明の外洋航海術や造船術、医学や測量術、商工業術を、キリスト教文明が吸収する欧州のフロント・エリア、さらには海と陸の貿易の、イスラム教圏とキリスト教圏の接合点として繁栄し、11～12世紀のコルドバやリスボンは世界でもっとも豊かな大都市になっていた。

そして、13～14世紀のレコンキスタ（キリスト勢力によるイスラム勢力に対する国土回復解放独立）闘争を通じ、民衆の地位能力が向上し、欧州諸国に先がけて、まずポルトガルが、次いでスペインが王制下の統一国民国家の建設に成功する。一方、十字軍行動を通し、盛んになっていた地中海貿易が、オスマン・トルコ勢力の進出と圧迫により制限され、新しい貿易路を拓く必要性が高まる国際情勢にあった。

こうして、レコンキスタを実現したスペイン・ポルトガルは、キリスト教の海外宣教や海外探検の意志と豊かな経済力を結びつけ、世界に先がけて新航路を開拓し、新大陸からジャガイモをはじめ多くの食物や動物、鉱物を欧州に持ち帰ることに成功したわけである。

（つづく）